

第3号

2013年11月10日

発行者

がん哲学外来市民学会
〒385-0046 長野県佐久市前山321-3
がん哲学外来研修センター
電話0267-63-5369 FAX0267-63-5389
E-mail:info.shimingakkai@gmail.com
http://www.shimingakkai.org/

がん哲学外来市民学会 ニュースレター

Cancer Philosophy Clinic Association for the People



がん哲学外来市民学会第2回大会 盛況のうちに終了

東海大学医学部 血液・腫瘍内科

第二回大会長 安藤 潔

第2回がん哲学外来市民学会を「がん患者を支える社会ネットワークの構築に向けて」というテーマの元に、お茶の水の東京ガーデンパレスで7月6日に開催いたしました。184名の参加者（会員70名、非会員114名）を得て成功裡に大会を終了できたこと、実行委員の皆様、参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

がん哲学外来カフェが全国に展開し、それぞれの場所地域豊かなカフェが開催されているように大会もそれぞれの主催地の特色を活かしたものとすることを目指しました。行政、医療、学問、情報発信の中心である一方で地域ネットワークの希薄な大都市東京。下町、大学街、郊外、それぞれ異なる顔を持つ東京。そのような特色が反映された大会となるようなプログラムを企画しました。

実行委員には東京周辺のメンバーだけでなく、第1回大会を準備した佐久から、第3回大会担当の福井から、福島から、金沢から御参画いただきました。実際に一同で顔を合わせたのは2回だけ

でしたが、その間にはメーリングリストで意見を交わしながら準備してまいりました。

午前中のワークショップでは、浅草（下町）、お茶の水（大学街）、多摩（郊外）といった特色ある東京のメデイカルカフェが紹介されました。また大病院に設立されたメデイカルカフェとして金沢大学、福島県立医大の取り組みが紹介されました。

最後に現在 32ある全国のメデイカルカフェ一覧が紹介されました。日本全域の患者さん、家族に私たちのメデイカルカフェを利用していただくためには、まだまだ 50倍に増える必要があります。しかも多様性を大切にしながら成長していく必要があります。地域の文化に根ざした全国メデイカルカフェ構想「がん患者を支える社会ネットワークの構築」の第一歩を実感できるワークショップとなりました。

お昼休みにはポスター展示で「メデイカルカフェあずまや」(大阪)、「メデイカルカフェ沼田」(群馬)、「福井済生会病院メデイカルカフェ」(福井)、「佐久ひとときカ

フェ」(長野)、「がん哲学外来カフェin長島愛生園」(岡山)をご紹介いただきました。

午後のシンポジウムでは、各界のオピニオンリーダーの方々から「がん哲学外来市民学会への期待」をお話し頂きました。

がん研究センターの堀田知光理事長からは「がんになってもしっかり暮らせる社会」を実現していくために本学会が担うべき役割をお話しいただきました。グループネクススの多和田奈津子副理事長からは、ご自身の患者体験を通して「語り合い」の必要性についてお話し頂きました。エッセイストの岸本葉子様には、人が苦悩を担う力を得るためのサポートのありかたをお話しいただきました。最後にがん研有明病院の門田守人院長より外科医としての経験の中から得られたがん医療のありかたをお話しいただきました。

引き続き演者に厚生労働省の三浦公嗣審議官を加えて、「がん患者を支える社会ネットワークの構築に向けて」という今大会のテーマにつきパネルディスカッションを行いました。樋野代表、読売新聞社の本田記者の司会のもと、その意義、現状認識、将来像、問題点など多くの重要なテーマについて実り多い意見交換が行われ本学会の目指す方向が確認されました。

最後に大会終了後に特設された「大会オリジナルカフェ」が大盛況だったのは嬉しい驚きでした。これは実行委員会の中から生まれたアイデアで、初めて大会に参加頂いた方々にカフェを体験してもらおうという試みでしたが、7グループとも会場の貸し切り時間間際まで話が尽きませんでした。

以上のように、第一回大会が昨年9月に佐久で開催されてから一年足らずでしたが、学会の成長を感じることでできた大会でした。大会終了後さまざまなメディアに取り上げられて、会員数も現在177名まで増加しています。

学会の目指す方向も明確となり、来年の福井での第3回大会まで、また大きく成長することを祈念いたします。



安藤大会長の講演に聴き入る(東京ガーデンパレス)。

がん哲学市民学会への期待

国立がん研究センター

堀田 知光



がんは早期発見や治療法の進歩によって生存期間が延長し、がんとともに暮らすことが普通のことになってきました。一方で、治療法が確立していない希少がんや再発もしくは治療が効かない難治がんで苦しむ人々も少なくありません。また、治療が奏効した場合でも副作用や再発の不安、生活や仕事の困難に直面している人々もいます。

しかし、こうしたことはがんに限ったことではありません。効率性を追求してきた健常者を中心の社会では、障害や病気を持つ人々は保護すべき対象ではあっても、同等な社会の一員として必ずしも扱われてきませんでした。誰しもいつかはがんを始め、重い病気や障害を負う可能性があります。障害や病をもつ人々が暮らしやすい社会は、健常人を含めた安心で成熟した社会であると思います。

かつて、昭和の半ば頃までは生病死はどの家庭でも日常の中にありました。その後、高度経済成長における労働人口の都市への移

動と生産の効率化の流れのなかで、核家族化と医療の病院依存が顕著となりました。こうして、生病死は非日常のものとなり、とくに死は忌避すべきものとして、正面から向き合うことが希薄になりました。家族や身の回りに何人もがんで亡くなっているのに、自身になると、「何で私が」とうろたえる人が多いのが現実です。がんは誰にとっても人生の一大事であることには変わりありません。

しかし、がんなどのように向き合うかによって、人生の意味が変わってくると思います。がんと真摯に向き合うなかで、家族の絆や生きることの意味を深めることができたと言語体験者は少なくありません。そのためには、健康の時から死生観を含めた自己の確立が大切ではないかと思えます。

がん哲学外来市民学会はまさにがんという病を通して、人生の意味を考える語り場であると思えます。今、がんと闘っている患者やその家族にとっては治療が願ひです。そして、より有効で体に負担の少ない治療が求められています。

一方で、最新治療によっても、あるいはがんが治癒したとしても、それと引き替えに体の一部を失ったり、手術や化学療法の後遺症が残る場合もあります。また、職場や家庭でのつながりや経済面での負担など社会的な問題を抱える人々が少なくない現実もあります。

本学会が、患者と家族や身の回りの人々、さらにはコミュニティとのかわりを通して、がんと共に生でいる社会のあり方にまでスコープを広げて、多くの人々が参加できる生病死を日常に取り戻す語り場として全国に広がることを期待しています。

語り合い、聞きあうこと

ぐるーぷ・ネクサス副理事長

多和田 奈津子



私は16歳のときに甲状腺がん、25歳のときに血液のがんである悪性リンパ腫を発症しました。16歳から現在まで「生とは死とは何か」を考え続けてきましたが、特に退院して間もなくは悩みをひとりで抱えきれなくなることがありました。

私はまず、家族に話しました。すると、本人以上に悩み苦しんでしまい、いつしか本心を話さなくなり、次は信頼している友人に打ち明けました。しかし、他愛もない会話の延長上に「生と死」という壮大なテーマを語るの、タイミングを要します。

そういった点からも、やはり同じ病を体験した仲間（ピア）でな

ければわからない部分があります。私が治療していた15年前は入院治療が主流で、期間も半年と長いものでした。入院期間が長いとデメリットも多くありますが、同室の患者仲間には、治療に対する心配ごとを耳を傾けてもらいました。もちろん医師や看護師の皆様にも困ったことをすぐ伝えることができ、時にはベッドサイドで「なぜがんになったのか」「がんになつたのは誰のせいでもない」と今思えば哲学に触れるような会話までできました。しかし、一度退院してしまふと何か特別なことがない限り、仲間や私の体調をよく知る医療者に会うことはできません。

今はがん治療も外来が増えていると聞いています。生活への支障は少なくなりますが、同じ仲間同志、医療者へのコミュニケーションが以前と比べて希薄になっていないでしょうか。最近では、院内、院外患者会は増え、各地で交流会も盛んに開催されるようになりました。しかし、まだ一人ひとりのニーズにこたえるには機会が足りません。

私が所属するグループ・ネクサスの交流会には県をまたいで参加してくださる方もいらつしやいます。仲間とつながりが持てる喜びを感じる一方で、都合が合わず参加できない人、開催自体知らない人もいらつしやるのだと思います。各地で何度開催しても、開催し過

ぎることはないのです。

サイレントマジョリティと言われる患者の内側にある悩みは未知数です。しかし、がん哲学外来が今後も発展し、医療者と患者と立場を超えたコミュニケーションの輪が各地で広がれば、ひとりで悩んでいる心の痛みが軽減でき、救われる人がたくさん現れることと確信します。がん哲学外来市民学会は、いまの時代にこそ必要な集まりです。今後のますますの発展を期待しています。



〈パネルディスカッション〉

左から堀田知光氏・多和田奈津子氏・岸本葉子氏・門田守人氏・三浦公嗣氏



司会は本田麻由美(読売新聞社)さんと樋野興夫代表。会場からの熱心な質問に答える。

第3回がん哲学外来

コーデイネーター養成講座

平成25年10月5(土)～6日(日)
佐久市がん哲学外来研修センターにて

がんになるのは不幸なことか

佐久総合病院 宮田 佳典



人間に老いと病と死はいつか必ず訪れます。しかしほとんどの人が「長生きしたい」、「病気になるたくない」と考えます。私の仕事は人々の病気がよくなり長生きするお手伝いをするのですが、長生きできれば幸せなのでしょう。私は患者さんを幸せにしているのでしょうか。

漫画家、故手塚治虫の代表作に「火の鳥」があります。この作品では火の鳥の生き血を飲めば永遠の命が約束されるという設定になっています。多くの人たちが生き血を飲むことに失敗し続ける中、たった一人だけが成功します。しかし生き血を飲んだ人は何億年経っても死ねなくなってしまう、生き続けることが苦痛となってしまふのです(詳しくは「未来編」をお読み下さい)。老いて、病になり、そして死を迎える。人間は

それを受け入れないといけないのですが、なぜか自分の身が病に冒された時、自分に心の準備ができていないことに気づきます。

心の準備ということについて、米国でアップル社を作ったスティーブ・ジョブズが心に響く言葉を残しています。彼は2003年に膵臓がんと診断され2011年に亡くなりましたが、2005年スタンフォード大学の卒業式に招かれ、スピーチで次のように語っています。

「私は17歳のときに『毎日をそれが人生最後の一日だと思って生きれば、その通りになる』という言葉にどこかで出会ったのです。それは印象に残る言葉で、その日を境に33年間、私は毎朝、鏡に映る自分に問いかけるようにしているのです。『もし今日が最後の日だとしても、今からやろうとしていたことをするだろうか』と。『違う』という答えが何日も続くようなら、ちよつと生き方を見直せということですよ。自分はまもなく死ぬという認識が、重大な決断を下すときに一番役立つのです。なぜなら、永遠の希望やプライド、失敗する不安…これらはほとんどすべて、死の前には何の意味もなさ

なくなるからです。本当に大切なことしか残らない。自分は死ぬのだと思ひ出すことが、敗北する不安にとらわれない最良の方法です。我々はみんな最初から裸です。自分の心に従わない理由はないのです」

限りのある命だからこそ、毎日
に意義がある。その事を病は教えてくれます。病の中でも、がんは人々にこれまでの生き方を振り返り、今後の生き方(死に方の方が適切かもしれません)を考え直す時間を与えてくれます。

がんになるのも悪いことばかりではありません。

ロジックというより

レトリック

岩手県立中央病院 加藤 誠之



よく聞く言葉に、「がんであろうと、なかりうと、最後は、人間は死ぬのだから」といって、慰めるように言われたが、そう言われても、全然、納得できない」ということがあります。いろいろな場面でこの言葉は聞いたので、広く流布した言葉なのでしょう。

確かに、死は厳然たる事実として否定はできないのですが、他人

から言われたら違和感のある言葉だと感じます。つまり、この言葉には、論理を使って無理やり納得させようとする感じがあって、受け入れ難いのではないかと思います。

では、人生や死というものを、対話の中に取り入れることが可能なのだろうか。改めて考え直さざるを得ません。平穏な生活から急に、がんという病氣と直面した時、「私は、何のために生まれてきたのだろうか」とか、「私だけが、何故、こんなつらい目にあっているのだろうか」と感じる方も多々と思われまふ。このような問いに、どう向き合っていけば良いのでしょうか。

もし、悩みを抱えた人に対して、傾聴的なアプローチをするなら、どうなるでしょう。恐らく、「何故、そのように思うのですか」と聞き返す感じですね。これは、問いに対して、問いで答える形式ですが、ここで、何故、問いという形式なのだろうと考えてみると、対話の場合、問う側に、圧倒的に対話の主導権があるので、答える側は論証しなければならぬのです。すなわち、誰もが確信をもって答えられない問題に対しては、問いは問いで切り返すのが一つの戦略だとわかります。

んな場面で使われる、短い言葉の例に挙げると、「人生、茨の道、にもかかわらず宴会ですな」という風になります。この言葉は、二つの命題からなっており、人生は茨の道である(命題A)、人生は宴会である(命題B)、ということなのですが、数式で書くと、「人生＝茨の道＝宴会」となりまふ。何かおかしいと思いませんか。命題Aも命題Bも事実のようですが、互いに矛盾するようですよ。人生は矛盾した内容を含んでおり、がん哲学外来の言葉も矛盾している、にもかかわらず、これを、確信をもって語ると、がん哲学外来の言葉になるのです。がん哲学外来では「ロジックというより、レトリック」と申し上げているのは、こういう観点です。残念ながら、ロジックは正しくても、人を救わない時があるので、が、正しく使われたレトリックは、人の心を和らげ、何らかの気づきがあります。気をつけなければならぬ点は、レトリックは、全ての人が学ぶべきものではないと言われており、心の伴わないレトリックの有害さを示していると思われまふ。

レトリックとは、人間学を修めた後の、究極の学問の一つであるということですね。このことが、がん哲学外来が、応対の二階部分であるといわれる所以かもしれまふ。

講座 グループワーク

「がん哲学外来での対話」

全国から集まってきた受講者の、和気藹々ときに議論百出の討論が展開されたグループワーク。

以下、ファシリテーターの方々からの報告です。

◆グループ7

井出 美由紀 (佐久市)

対話という大きなテーマで果たしてどんな方向へすすんでいくのか：でも楽しみ！メンバーの皆がそんな思いで臨んだグループワークでした。始まってみると、しっかりテーマへ入り込んでいて、ナラティブを語ることから気づき「対話」していました。そして、生み出た答えが次の3つ。

- 1 「哲学するチャウチャウ犬」
- 話を聴く態度・暇げな風貌・寄り添う。雰囲気大事、形から入ることも必要、聴く側がほんわりしていること。強みは活かしつつ、ゆっくり話す・ゆっくり歩く。患者は全身で医師を感じている！人生観が見えれば信頼が生まれる。
- 2 「対話に必要なもの」

対話の大前提は人間として対等であること。言いつばなしではなく、最後に分かち合うことが大切。隙間を埋める「場所」を提供する



対話の大前提は、まず、人間として対等であること。

◆グループ1

荻原 弘恵 (佐久市)

昨年は「がん哲学外来」を良く知らずに初受講しましたが、今回は全国から来られた皆様方が、がんを体験された友人や家族のために何かできる事がないかと真剣に

こと。「傾聴」は入口である。3 「がん哲学のART」 ARTとは矛盾するものを調和・融合させること。そうすることで、解決はできなくても解消はできる。 たくさんさんのキーワードを一つの完成したものにまとめ上げ、発表を聴く中からも、またそれぞれに「気づき」がありました。さらに「対話」を広げ、日本全国に繋がっていくことを願っています。



医療の隙間を埋める居心地の良い場所を増やしたい。

話し合う姿をみて、今まで医療の現場でしかがんに関わる方々と接する機会がなかった私にとって感動の連続でした。 今年、「対話」がテーマ。「対話とは？」と考えてみても直ぐに言い表すことはできませんでした。グループワークに参加された方々と討議していく中で、自分一人では気づくことのない大切な言葉に触れ、この討議こそが「対話そのもの」であると感じました。 実は、私自身もがんと向き合っている患者家族です。偶然、この養成講座が開催される時期に合わせて、昨年はがんが見つかり手術しました。今年、がんが再発のとなつています。義父に、「一人ではない。家族みんながいるから」と笑顔で言葉をかけるのが精

◆グループ6

棚瀬 裕文 (東京都)

一杯でした。 今後多くの方々に「がん哲学外来カフェ」を知っていただき、医療の隙間を埋める、居心地の良い場所が皆様の住む地域にもできることを願っています。参加された皆様と対話を通して大切な時間を共有できたことに感謝します。 自宅への帰り道、自然と笑みがこぼれ、自分の心が豊かになったことを実感しました。皆様ありがとうございました。 とうございました。

自己紹介の後、FA勉強会で体験したように、全員をペアに分けて対話を体験しながら発表プレゼン案をまとめる作戦を立てました。「患者としてセカンドオピニオンができないので悩んでいる」「がん哲学外来コーディネーターとは何?」「認定基準の理由は何?なぜ?」などと次々に話題が出て、参加者を分けての「対話体験」をしてみようこともできず、発表者も決まらず、模造紙への書き込みもなかなか進みませんでした。 会話と対話の違いは、相手と話の論点をずらさずに最後まで話を続ける能力です。相手が話している内容をきちんと理解する必要がある、自分が話したい内容の中から、何を話すべきか取捨選択をして、的確に相手に伝えなければな



養成講座は「生きる人間力の研鑽の場」です。

りません。 しかし私の頭の中は、グループワーク時間の終了30分前までは、「グループ全員がまとまらない、作業に取り掛かれない、困った! どうしよう!」が回っていました。 これは私自身の都合だけで思考が回っていた証拠です。参加者ひとりひとりの立場で考えていないのです。対話が自分自身で成立していませんでした。自分の対話力の無さを思い知らされました。 が、最後の30分間で奇跡的にまとまり(発表者はリハサルを何回もして翌日睡眠不足だったそうです)素晴らしい発表でした。 この養成講座は「生きる人間力の研鑽の場」であり、この失敗体験が私の誕生日(10月6日)の貴重な贈物でした。

◆グループ3

車屋 知美 (福井県)

養成講座には今回で2回目の参加ですが、昨年の講座に引き続き、今回もグループワークのファシリテーターを担当させていただきました。

私の担当した3班は、メンバーが、老若男女、立場も様々な構成でした。「がん哲学外来での対話」について、それぞれの立場からのご意見を率直に出していくうちに、「そもそもコーディネーターとは?」「がん哲学外来って?」という話も出てきて、「対話を促進するための『場』とはどういうものだろうか?」という疑問につながっていき、『場』についての話が進んでいきました。

患者さんとして、地域で患者さんやそのご家族の集う場に関わる者として、医療者として、これまでの経験から感じてきた思いを出し合う中で、対話を促進するためには、『心に寄り添う傾聴』『話しかけやすい環境・雰囲気』『安心・安全の場』が用意されていることではないか、という結論に至りました。

私としては、3班のグループワークの場そのものが、『心に寄り添う傾聴』『話しかけやすい環境・雰囲気』『安心・安全の場』で満たされていたように感じました。

た。振り返ると頼りないファシリテーターで大変申し訳なかったの思いでいっぱいです。

しかし、話し合われた内容をほのぼのとしたイラストやシールとともにグループの色を出してわかりやすくまとめて下さり、また、立派に発表して下さいだったので、班の方達には感謝あるのみです。



心に寄りそう傾聴ってどのようにしたらよいのか…。

◆グループ2

小林 真弓 (東京都)

二日間の講座が終わりました。初日の雨から、翌日は秋晴れ、気持ちの良い天気になりました。私は、去年に引き続き2回目の参加今回も専門的は講義、グループワークと盛りだくさんの二日間でした。今回は哲学という事で哲学者の川田先生の講演もありました。



明日の発表会に向けて和気藹々と進行しています。

川田先生のお話はとても楽しく、『会話ではなく対話の大切さ』『自分で考えて、自分で決めて、自分で行動する』の言葉を自分自身に問いかける二日間でした。

今回、私はグループワークでのファシリテーターのお役を頂き、緊張の中に当日を迎えました。勉強会や資料などがあり、楽しくもありましたが難しさを感じていました。でも、私が、いろいろ考えているよりも、グループのみなさんお一人お一人の力で、発表も無事終了しました。グループのみなさんに感謝です。

今回は、初めての参加者も多く、がん哲学外来、メディカルカフェの広がりを感じる二日間でした。私は、東久留米がん哲学外来のスタッフをしています。同僚の合言葉は『何気なく、さり

◆グループ9

西澤 文恵 (東京都)

第9グループのグループワークについてですが、様々な職種とがん患者当事者さんの10名で展開されました。

皆さん自らが「がん哲学外来」への思いや思考を語られ、がん哲学外来養成講座への意欲が感じられました。しかし、「がん哲学外来カフェ」の目的や意義について参加者全員が共有できていたかについては、疑問が残ります。

グループワークの中で、何度もカフェの目的や意義などについて共有することを試みましたが、短い時間の中では困難な状況であったと判断しています。

しかし、10名が「対話とは?」について熱く議論できたことは、大変有意義であったと思います。参加者一人ひとりの思考が違うことは当たり前であり、それが人間であると考えます。だからこそ、今回のようにいろいろ議論するこ

とが必要であるし、グループワークを進める中で、今後の「がん哲学外来コーディネーター養成講座」の課題が浮き上がったことも、良かったのではないかと思います。10グループの発表はどれも素晴らしいものであり、参加者全員の意欲を確認することができました。何かを行い、課題が出現してくることは、すばらしいことであると

とが必要であるし、グループワークを進める中で、今後の「がん哲学外来コーディネーター養成講座」の課題が浮き上がったことも、良かったのではないかと思います。10グループの発表はどれも素晴らしいものであり、参加者全員の意欲を確認することができました。何かを行い、課題が出現してくることは、すばらしいことであると



若い発表者の情熱と真摯な態度に、会場から拍手。



対話とは……、熱い議論が交わされました。

◆グループ8

寺尾典子(佐久市)

「哲学」という言葉は難しいイメージがありますが、コーディネート養成講座を受講して生活の隣に存在しているものだと感じました。小さいころに周囲の大人が子供にいろいろな問いかけをして考えさせ、答えを返すなどの日常生活や人と言葉を交わす、話をする、考える事が哲学なのかなと自分なりに思いました。

川田先生の講義で印象的だった言葉の「よく生きる事」。グループワークテーマの「対話」とともに「よく生きる」の「よく」は何だろう?対話カフェに来た時は暗い表情の人が、帰りには笑顔で帰っていくのはなぜだろう?と話していました。

ファシリテーターとしてスムーズにグループワークをすすめる、出しゃばらずに、さらにメンバーの思いや意見を引き出し、まとめる役割をしなければと緊張していましたが、そんな心配は無用でした。テーマについて投げかけると10人いれば視野が広がり、新たな気づきを私に与えてくれました。時間管理についてもメンバーの集中力は素晴らしく、時間内にまとめる事ができました。グループワーク終了時には全メンバーが笑顔で交流できていたのが「対話」効果

だと思えます。

そして、私のグループには最年少参加者(一歳)が存在し、彼女の声や仕草にみんなが自然と笑顔を向け、手をさしのべていました。彼女に助けてもらったところが多くあり、これがコーディネーターの資質として必要なものかなと羨ましくさえ、感じました。

私は養成講座にはスタッフとして、受講者として、またファシリテーターとしての役割を与えられ、養成講座の数日前から緊張していましたが、今はほっとしています。今後は養成講座で学んだことを「浅間対話カフェ」の運営や仕事の中で生かせるようにしたいと思っています。今はまだ言葉にはできませんが「がん哲学外来」「よく生きる事」について語れるように日々考え、行動していきたいと考えています。グループメンバーの皆さん、良い学びを共にして下さい、ありがとうございます。



最年少の心陽ちゃん(1歳)はグループの大事なメンバー。

がん哲学外来の学び

佐久総合病院 荻原 菜緒

私はこれまで外科医師として患者さんを診療してきました。若い頃は、医療の技術をもって病気を克服しているような錯覚を感じることもありましたが、経験を重ねるにつれて、医療の現場における標準的な考えや常識、目に見える科学的根拠だけでは対応しきれない、あるいは説明しきれないことが実に多いことに気づきました。ひとが生き生きと日々を過ごせるかどうかは、病気が根治したか否かに関係しないのかもしれないと感じることもありました。

一体何が大切なのだろうと模索する中で、がん哲学外来の存在を知りました。心の深いところに落ちた気がしました。今回の養成講座を通して「生きる意味」に真剣に向き合うこと、自分に対しても目の前の人に対しても尊重の念をもち真剣に向き合うこと、このことが根源なのだと感じました。

そしてこれは、イギリスで始まった新しい形のがんケアセンターで感じたものと全く同じ感覚だと気づいたのです。イギリスのケアセンターでは、どう生きてきたのか、どう生きていきたいのかを感じながら、自らの想いや意志を大切に、自己コントロール感を持って主体的に積極的に歩んでいくことを一番に掲げています。ス

タッフは医療従事者である前に一人のひととして、目の前のひとを尊重し寄り添うことに徹していました。

日本から生まれたがん哲学ですが、世界中で同じ絵をみんなが描き始めているのだと思います。この地球に命を授かって生きるということ、この根源と向き合うことは、文化や宗教、言語の違いを超えて共通なのだと感じました。こんなにも多くの仲間が、爆発的な意欲とエネルギー、かけがえのない縁を総動員して、最初の一步を踏み出していることは、私にとつて大きな力となりますし、大きな流れに繋がると思います。



がん哲学。世界中で同じ絵をみんなが描き始めているのでないでしょうか。

養成講座を受講して

三ツ井 克子(佐久市)

私は事務局の片桐孝子さんとの出会いから「がん哲学外来」を知りました。樋野先生が言われる「暇げな風貌」ですが、これは話しかけられやすい雰囲気、優しいまなざししていることだと捉えています。また、「偉大なるお節介」については、私もそういう傾向がある

ようですし、今後とも「がん哲学外来」の活動に興味を持ち、できる限り参加していく積もりです。

さらに、樋野先生が著作の中で述べておられる「がん細胞の中で起こることは人間社会でも起きる」の一文は、私の胸にストンと落ちてきました。それまで私が学んできたバランスセラピー理論の「人は一人では生きられない。人は様々な関わりの中で生きています。自分自身とそして他人と」を思い起こしたからです。

人は気づいたときから、日々、生まれ変わるのです。まさに一日一生、です。人として生まれ、人間として育っていく。そして死後も魂は生まれ変わりをして成長していくのです。

体から心へアプローチする非言語のカウンセリング技法を実践し、多くの皆様からパワーを頂いている私ですが、今回の受講を通して「対話とは」を実践で学ぶことができ、深めることができました。「自分と他人は同じです。他人に對し怒り、悪口をいうのは、実は自分に対し怒って、自分にイライラしており、自分の細胞を傷つけているのです」。



今回の受講を通して「対話とは」を実践で学ぶことができました。

「ともに考えてくれる人」

浅間総合病院 村島 隆太郎



養成講座のパネルディスカッションで「がん哲学外来コーディネーターは、科学としての医学と、個性・一回性の臨床と、言葉にして普遍性を求めようとする哲学と、三つの間に位置して医療の『隙間』を埋める存在である」と、私見を述べました。

その後のグループワークでは、様々な立場の方々から各人の物語を伺うことができました。多様性を認め、それぞれの立場の意見を聴き、その人達の物語の中に入るとともに考えるのが、がん哲学外来コーディネーターの役割です。悩みを一言で解決できればよいのですがそれぞれの抱えている問題はそれほど簡単ではありません。

福島原子力発電所の事故後、原子力工学者に対しての不信感が芽生えました。科学神話に対しての揺らぎがおこり、市民の求めているものは、高度な知識を持つて自分の代わりに答えを出してくれる人でも、責任をとってくれる人でもありません。「ともに考えてくれる人」が求められています。近年の医療の現場でも、疾患のこと

だけではなく、その人の悩みをもに考えてくれる人が求められています。

がん哲学はinterdiscipline(学際的領域)にあり、がん哲学のみの専門家はいません。がん患者さんの抱えている問題を、多様な人がそれぞれの専門性・それぞれの経験・それぞれの使命感に基づいて、ともに考えるからよいのではないのでしょうか。

異なった価値観の人々が、共生していくのに必要なのは「有責感」です。「それは私の仕事ではありません」「責任者を出せ」と言われる方が増えていく中、がん哲学外来のような、誰の仕事かはつきりしないが、誰かがやらなければならぬ「隙間」の仕事を、進んでやろうとすることは素晴らしいことです。

「有責感」といつても自分を責めることではありません。親・師・先人・経験などから学んだ「よきこと」を子・後輩など他者に伝える使命感を持つことです。人類の罪を背負うキリストにはなれませんが、理性を他者のために使うことは可能です。グループワークがうまく機能しなかったと思っても悩む必要はありません。今後、みんな考えていけばよいのです。ファシリテーター・発表者は「隙間」を埋めた方々です。それだけでがん哲学外来コーディネーターの資質があると私は考えます。

がん哲学外来 第3回コーディネーター養成講座を終えて

スタッフ 小林 久子

第3回コーディネーター養成講座のテーマは「がん哲学外来の対話」でした。私達スタッフは、グループワークを重要視して講座前にファシリテーターの学習会をすることに決めました。17名の方が参加されて実施出来たことは、大きな力となりました。講師の安藤先生に感謝いたします。

また、講座も3回目を迎えましたのでがん哲学外来の「哲学」に着目し、佐久在住の哲学者・川田殖先生に「同じ目線でケアをする」対話の哲学的意味」で講演して頂きたいとお願いしました。

川田先生は、受講者の席の近くまで行かれ、視線を合わせながら話をされました。その姿勢に気迫を感じ、この世で一番大切なもの—シズちゃんとの対話—には思わず聞き入って、哲学・対話についての「大切なことはただ生きるのではなく、良く生きること」の言葉が心に沁みました。

講座受講後のアンケートには、
・これからでなく、今どうしたら良いかを考える。
・本当に良かったです、自分の人生にとって財産となりました。
・哲学について改めて意識できた。
・自分の方向性が持てたと思う。

・対等に向き合って対話をする事が大切なのだと気付きました。などの言葉が寄せられました。(グループワークについては、

・自分の感情や価値観に捉われず、無知の自覚を持ち、謙虚に相手と対し共に悩み解決を求める。

・対話が基本であると考え、講座の参加回数には関係なく、がん哲学を知らない方など、どなたが参加しても良いと思う。

・グループワークでいろんな立場の方々の実践、思いが伝わり、自分自身をしつかり見直すきっかけになりました。

・グループ別のディスカッションはとても充実してよかった。「会話は」と「対話とは」というように集中して話し合えたことで深められた。

・がん哲学外来は「がん」のみならず、難病生活習慣病・心の病・老いなど、これからすべての分野で必要とされるだろう。

・患者・医療者の枠を超えて、人は皆対等の視点から、愛(関心)を持って、相手の言葉に耳を傾け知りたい分かりますと思う心を持ち、真摯に対話する姿勢が求められる。

・これからも「がん哲学外来カフェ」を行うとき、問いかけ調べ吟味する姿勢を持ち、これの良いのかと常に内省する気持ちを持ち続けたいと思う。などが寄せられました。

■講座にファシリテーターとしてご協力いただいた方々、そして全国から参加された皆様、本当にありがとうございました。
佐久の地で3回の養成講座を開催させていただき、みんなで夜遅くまで話し合い、議論し実施できたことは私の心の財産です。あらためて感謝いたします。

10班からの発表 和やかに(4班)



～対話の哲学的考察～ 温かくそして鋭く。受講者に近寄り、同じ目線で話をされる哲学者・川田殖先生。

認定制度委員会(2012.11.24発足)

- ◆委員長 石田 卓
(福島県立医科大学)
- ◆委員 安藤 潔
(東海大学医学部)
- 加藤 誠之
(岩手県立中央病院)
- 宗本 義則
(福井県済生会病院)
- 村島 隆太郎
(佐久市立浅間総合病院)
- 宮原 富士子
(ジェンダーメディカルリサーチ)
- 片桐 孝子
(がん哲学外来研修センター)

がん哲学外来市民学会認定コーディネーターの認定基準

1. 学会認定コーディネーター資格は以下の要件を満たし学会認定委員会に資格申請を行うことにより取得できる。認定委員会により審査され適確と認められたコーディネーター候補者は、学会理事長の承認を受けて認定コーディネーターの資格を得る。
 - ① 学会認定「がん哲学外来コーディネーター」は「がん哲学外来コーディネーター養成講座」3回分の修了証を取得していることを要件とする。
 - ② 学会認定「がん哲学外来コーディネーター」申請時にはコーディネーターとして自分の目指すところを400字から800字程度でまとめた小論文を提出する。
 - ③ 学会認定「がん哲学外来コーディネーター」は下記の倫理指針に準拠する。違反した場合は認定を取り消すことがある。
2. 学会認定「がん哲学外来コーディネーター」資格は有効期限を5年間として、更新することとする。更新要件は認定期間中の5年間で学会年次大会への参加3回以上とする。

がん哲学外来市民学会 第3回大会
Cancer Philosophy Clinic Association for the People

大会長: 田中延善 (福井県済生会病院 病院長)

「がん哲学外来の見据える
これからのイノベーション」

日時: 2014年7月13日(日)
9時30分～16時(開場: 9時)

会場: 福井県民ホール
(福井市手寄1丁目4番1号アオッサ8階)



第4回がん哲学外来コーディネーター養成講座
日時: 2014年7月12日(土)
会場: 福井県済生会病院

次回の市民学会大会


ついこの間、第2回大会を東京で開催したばかりですが、もう3回目のお知らせです。福井の地で、私たちは皆様を熱い歓迎の心でお待ちしております。

福井県済生会病院
大会長 田中 延善

**第4回
コーディネーター
養成講座**

大会の前日に企画しています。第3回に引き続き、より深化した討論を期待します。

済生会病院
宗本・車屋



がん哲学外来カフェの心得
～立居振舞い3ヶ条～

がん哲学外来カフェの方針の3ヶ条


- 他人の必要に共感すること(自分を押し付けない)
- 暇げな風貌(忙しすぎてはならない)
- 速効性と英断(いいと思ったらすぐ実行)

カフェスタッフの要件の3ヶ条


- 品性(人生の目的は品性の完成である)
- 使命感(偉大なお節介)
- 犠牲を払う(自らは犠牲になっても、心は豊かになる)

がん哲学外来カフェの役割の3ヶ条

- 個人面談
- 場作り(来訪者にお茶をだす)
- 研鑽(30分間の沈黙にも、お互いが苦痛にならない存在となる)



これからの多くの方々のがん哲学外来への思いや情熱を形にしていく縁の下の力持ちになれたらと思います。



そこで本年7月3日に社団法人がん哲学外来(理事長・樋野興夫)が設立されたのに併せて「がん哲学市民学会の運営を社団法人が行う」ということが、7月6日のがん哲学外来市民学会世話人総会で提案され、承認可決されました。

先般開催された「第3回コーディネーター養成講座」は市民学会と社団法人が一緒に活動をする第一歩として、関係者同士が互いに親しみ信頼しあつて講座を開催することができました。

**一般社団法人
がん哲学外来設立
市民学会活動のサポーター**

一般社団法人がん哲学外来
事務局長 多喜義彦

二〇一一年に誕生した「がん哲学外来市民学会」は、多くのボランティアの皆様による任意団体として活動して参りましたが、賛同する会員の方々が増えるにつれて活動を円滑に進めるためにも組織としての支えの必要性が生じて参りました。

昨日の「佐久ひとときカフェ」に茅野市から車を飛ばして来たのは、養成講座で編集者と同じ班になったK医師だった。「外科医を長くやってきたけど患者さんと真の対話をして来なかった。樋野先生のがん哲学思想をもっと深く知りたい」と。

これらの現象を「医療の維新」(樋野先生の言葉で)と云わずして、ほかに説明の仕様が無い。
秋深し、日々学ぶべし!

Mさんが養成講座に駆けつけてきた。この夏、伊那市での「がん哲学外来講演会」にいたく共鳴し、樋野先生の著作3冊を購入した由「素人の私がコーディネーターなど」と尻込みしながらも、講座が終わるや否や、次回福井での受講を決めた。

編集後記
ニースレーター編集人
星野昭江

先月、市民学会副代表青木裕子さんの「日仏親善朗読公演」に同行した折、パリからポークール市に移動するTGVの車内で偶然T氏と相席になった。

T氏は(そう言えば)去年の暮れ、「浅草(下町)がん哲学外来シンポ」を見学に来た方だった。住まいが志木市だと分かり「がん哲学学校」に話が弾む。帰国してまもなく「志木がん哲学学校」に参加。大いに感動した」というメールがT氏から届いて、驚いた。